

彫刻家の見たいもの

——命のかたち・かたちの輝き（aura¹）・かたちを^{なげうつ}抛——

新関 八紘（東海大学）

1 はじめに

作品を前にして「自分の造形活動について、考えを、意図を、内容を、言葉で語れ」と、彫刻家は問われる。そこで、語り始めれば……「語る気になるんじゃないかった」という反省とともに語ることに違和を感じるようになる。その違和感は何故なのだろうか？

私が眼による表象を言葉で考えることの特別な訓練はさほど受けていないからであろうか？ 造形の本筋は言語を絶する所にあるとってしまえばそれまでだが……。

事柄・対象の感受に際して「この生きている瞬間」の「考える」とは一体どのような状態になっているのだろうか？ 「考える」という活動を（が）“かたち”にする（なる）とは、どのようなことなのだろうか？



（ロダン『考える人』ロダン美術館）



（『弥勒菩薩半跏思惟像』広隆寺）

2 言語による表象

私たちが何かを考えるのは主に言葉によっている……言語には像を伴うものとそうでないものが考えられる。「言語による思索」と「造形する時の思考」はどのように違うのだろうか？ 造形の視覚感動は、言葉の支えがなくとも始まるが。対象を前にして何かを言おうとするなら、まず決められた言葉が必要だろう。記憶や想像などからの言語の像についても同様である。この時、既に言葉という置き換えの道具があり、制度化された操作で説明されなければならない。そうでなければ言葉にはならない音が発せられるだけではないか。単なる音声でも繰り返し体験されれば言葉になる。つまり、言語は経験の蓄積によっ

て生まれるという生成の歴史を抱えている。経験した歴史を持つ二次的言葉の像と、初回の体験である視覚の像とでは新鮮さが違うように思われる。

《造形》の視覚感受による表象は、考えるという生の営みと同時・同所で起る。

対象との出会いによる《造形行為》の瞬間と生の同時・同所な像・感動は言語の経験済みの像・感動と一致するとは限らない。

視覚感動、この生の一回限りの瞬間を、変な言い方になるが、“一回＝生”と試してみよう。一回＝生＝考えは瞬間として何がどのように、どこから、おきる（到来する）のかはよくわからない。生まれる彫刻のかたちの、選択・定着、興る感情の変移についても予測や統御の埒外である。² 「見えたもの」の初発の^{なま}生の“一回＝生”の感動・像は衝動的ともいえる奔放さが特徴であり、追体験的である言語の感動・二次像とはかなり異質である。言語による像は意味の作用がはたらき、強固な制度的体系を持ち既得的であるから私には自由な感じがしない。言語は造形する時には厄介な代物ではある。しかし人間のあり方の根元でそれ自体の機能に支えられて『考え』の中心に欠くべからざるものとしてある。人は考えないわけにはいかない。

問題は言語による表象である。

私たち日本人は漢字という象形文字を使うので気付く筈だが自由が削がれていると感ずるのは私だけであろうか？ 私には造形をする“この生”とイコールの同時・同所の活動の中で、視覚感受による結像は一回＝生の視覚創作実現としてあるから、その直截さに於いて視覚に軍配は傾くのだが……では言語のような既存性を視覚像は負っていないのかといわれれば、かなり怪しい。視覚像の生成に於いても、情報の与えられかたによって見えてしまうものの質的变化は免れない。明治以降の脱亜入欧を狙った教育は、私のような昭和世代人の記憶でも、西洋の美術の受容と基礎訓練に終始していた。体系的に輸入された技術教育で色づけされている。

私が造形に足を踏み入れた当初の制作のあらましを述べれば、

○写実 「見えたもの」＝現実(?)に近い描写再現(?)が「上手い彫刻」と思っている素朴リアリズム。先達を「見て、真似て盗む」という職人芸風のソックリ主義。

視点の違う意味内容や他人の感じたものをなぜ真似ようと考えたのだろうか？

立体物は形態の「型」抜きをすれば寸分違わない「型形態」が派生する……。まさに写＝真＝実のような考えに基づいた像である。そうした事情もあって言語の解釈がまわりついているのを、深い感得によって「見えたもの」とすら思っており、抵抗は感じていない。彫刻のアクチュアリティは文学的趣味に支えられたレトリックによってではなく、若い作者の一回＝生への信憑、衝動などのエネルギー量による存在感の強さからくるものであることには気付かなかった。

○具象 一般に普及しているソックリ主義は、“実”や“美”が対象の側にあると信じていた。「型形態」と「彫刻フォルム」の違いの説明に翻弄されることを避けるためにも「意味」を強調する具象彫刻と言われる描写手法で二次説明的・心情的、かたちを獲得したかった。この制作傾向は私だけではなく、近代彫刻の大多数の作家が「写実」と「具象」を制作の目安としてきた二大潮流だと言っても過言ではない。

それでも、視覚の直接＝生への信憑の根拠はどこから来るのであろうか？……

3 造ることは生きること

造形する契機は、A 意味による場合（表現主義的に）も、B 感受による場合（写実主義的に）もあり、C 意味からも感受のみからも離れて始まる場合も考えられる。

A 意味から始まる場合（表現主義的に）

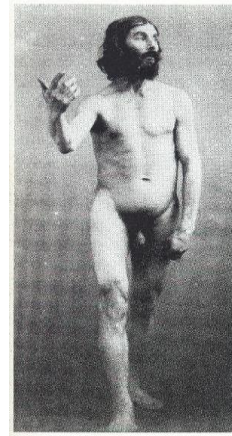
明治以降の、内面の表出を側におく造形観は、西欧風の“神の視点”で人の生涯を俯瞰するような人間中心主義である。悪くはないのだが、意味が生まれる言葉の秩序までを辿るような探索が必要であり、“かたち”は説明の必要から、表象や心理を再現するという文学表現主義的性格を帯びる。おまけに 19 世紀後半辺りからの心理主義的人間理解の表現主義にも強い影響を受けているからなおさらである。

『表現』は私には疑問である。なぜ『表現』をしなければならないのかは解らない。

他者との交流、互いの内面の理解し合いのツールの延長上にあるのが『表現』だからということらしい。



（ロダン『洗礼者ヨハネ』ロダン美術館）



（モデル・イタリア人農夫ピニヤテッリ）

○何者か 『表現すべき……私は』、既に有るのか？ ……何処に有るのか？……

私が彫刻をすることの本意は、得体の知れない、不気味な、「他者」に向けて何かを発信することではない。他者に自分の内面を解ってもらおうなどという、どうでも良い願望もない。勝手に申し訳ないが、私には先に見たいものがある。己のあり方と“かたち”である。

『今、ここ』の……その都度の「私」は何者なのか。高齢にはなっているが、未だ確信には至っていない……興味や問が沸々と湧いてくる。彫刻することは「生」そのものであり、表さなければ「像」はなく「考え」はない、強くいえば『自分』もない。造るのは生まれくる「像」を、「考え」を獲得したいのであり、かたちで『自分』は、何者か？ を見ようとするのである。² 「もやもや」と既に何者かであることを保証されているのではなく、有り

続けることと、何かをすること、とが同時・同所で営まれている。

「命の先端」としての彫刻が同時・同所の自分である。

○表現か？ 『自分』を見る行為が彫刻だが、造ることに拘り続けるのだから他所から見れば何かを『表現』しているように見えてもおかしくない。

先ほど述べた通り「今、ここ」の“命のかたち”は確かめられてはいない。

「今」は……「何者か」だと、決まっていなかったのではなかったか？……そして、こちらには他所のことは解らない。感受することで得た像を創るのは、表現として他者に理解を求めるためだけだろうか？……生きている先端の私は本来ここに無い、私になりつつある、死に至るまで更新中である。仮の「私の物語」²を誰に伝えようというのだろうか……？ 仮の表象の説明に夢中にはなれるが、終わると何か虚しい。既知を組み合わせで構成したに過ぎないような気がするからである。造られるもののデジャ・ヴュ (déjà vu) な感じの枠組みは気持ちが悪い、何かを生んだという悦びが薄いのである。

昨今のように『表現』ばかりが強調されるとグロテスクな自己顕示が突出し、時に、他所好みの機嫌伺いのようにもなる。その都度の共生は平和のためには必要でもあろう。人は皆似たようなものかもしれないが、……“共”に考える？ “共”に感じる？ 他所とこちらの生は徹底的に重ならない。違うのである、違って自然である。つまり、『表現』が目的の彫刻は、彫刻でなくともよい物語を彫刻にするナンセンスな作業と言える。

B 感受に基づく（写実主義的に）場合

感受からのみの結像は彼岸の対象が主役になることである。対象が含み持つと思われる“実”（？）が前提であり、そこに潜む実の探索が狙いである。写実主義というものであろうか？ ここでは、感受対象への圧倒的“実”感……への確信（仕掛け=制度）を疑うことは出来ない。疑えば制作の意欲は消えるからである。結局、像の探索の仕掛けが既に制度的“有る”ものの解釈であり、説明であり、演出された代用品の追従である。これも主導権を握られているようで気に入らない。生の生^{なま}には到達^{せい}しないで終わるという不満感が残る。



（ロダン『地獄の門』）



（同テラコッタ試作）



（同『バルザック』）

C 「意味」からも「感受のみ」からも離れて生まれる場合

私の現在の制作は、Cの契機を専らとしている。

○造形（＝生） 次表に示す（オ）造形の要素〔道標〕のみを精・鍛錬する必要があると思っている。それ以外が多用される個別の造形＝生は、焦点の定まらぬ、散漫な、鮮度のないかたちとなる。人の生の実際は考えの純度を保つのは極端に難しい、個別の生は気紛れなものである……。よって、造形＝生（命）、のブレを避けるために、原理や主題は極力シンプル、ミニマルなものが良い。実存は非合理である、想を練り作る営みには、要素の恣意性、不覚性、変移が紛れ込むのはどうしても否めない。揺らぎや躊躇、変節は常であることを忘れてはいけない、命には不確物がつきものである。だが、それをマイナスの要因とばかり解することはない。

○自由 恣意的、非意図的な現れの内には、この生の瞬間（＝はずみ、衝動、命のかたち）として、積極的に評価しても良いような、新たな“自由”なかたちが現れる場合もある。かたちの誕生＝発現として捉え、^{なげうつ} 抛って置く。『天に向かって^{なげうつ} 抛』（千利休『遺傷』）³のは、その事柄がどうなるか予測のつかない、人知の切っ先を楽しむことである。人の判断を超え破ってしまうことも厭わないような“かたち”が生まれでた時の覚悟を指す。かたちを解き放つための『場』さえ不問である。

4 造形の要素

彫刻するという造形の場所を説明すれば、下表の（ア）～（エ）までは彫刻が生営みの場として展開される「場」である。（オ）の造形の要素〔道標〕は彫刻する生の「展開・推移・生成・形成・変移」の目安である。（カ）表れの要素は生まれるかたちが「他者からの解釈領域」に近い。「見えてしまう」とでも言えるだろう。細部の要素の内容はランダムに示しただけである。

| | （オ） 造形の要素〔道標〕 | （カ） 表れの要素（非意図的情趣） |
|------------------|--|--|
| （ア） 素材の場 所 | 時空 生れでる以前の何か、何処か ² 天地、到来、自発、投企 生成 命（zoe）偶然＝生、aura ¹ 、変移 有限 独、自、不換、一回＝生、単一 対象（他者） 間 気合 抛 ³ 交感 互換＝生、一如、集中、没入 作者 ^{ごうん しき} 五蘊＝色、受、想、行、識 ⁴ | 質感 色調 大きさ 重量 風合 自由 |
| （イ） 造形の場 所 | 量塊 面、かたち、重さ、大きさ、立ち フォルム 方向、量・面・前後・左右、 軸、上下、芯、正逆、相対、 空間 動勢 捻、飛、躍、蹲、落、反、転、順、 逆、静、揺らぎ、進、流、展、傾、 | 大地性・空間感・時間感 無常（瞬、有限、孤独、死、偶然） 感 臨場感（アクチュアリティ） 苦・快（五蘊＝色、受、想、行、識 4）感 |

| | | |
|-----------------------------|---|---|
| | 昇、降、縮、緊張、弛緩、矯め、 転倒、軸、芯、時 結像 立ち (pas ⁵)・順・逆・破 結構・配置 位置、定・倒置、広がり、 空間、抛 | 心地感 関心 |
| (ウ) 生命の場 所 快 (⇄ 苦) | 生成 偶然=生 (zoe)、独自、アウラ 身体 活力、快=生、熱量、独、露 感覚 視覚=生 (bios)、触覚=生、味覚、 聴覚、閃き、直観、生氣、露 感動 美、満足、歎、麗、艶、味、驚 衝動 躍動、精気、調子、性、弾み 情調 活、無常、鬱、愛、悲、苦、歡喜 | 微、緻、密、生、病、老、死、悲、 怨、静、寂、噪、温、冷、鋭、鈍、 迅、遅、辛、望、忍、優、破、緊、 哀、性、愛、美、絶、雅、鬱、滅、 愉、満、苦、怒、懷、艶、妬、媚、 弾み、衝、噪、悩、敗、粹、奔、明、 憂、硬、軟、清、快、斷、あはれ、 滑稽、惑、可笑、虚脱、機嫌、解放、 孤独、呪詛、抑圧、別離、欲望、驚 き、その他 |
| (エ) 美審究の 場所 | 生動 靈、聖、根源、到来、無常 生死 空、緊張、無、弛緩、滅 時間性 始、盛、推移、流、破、急、終 純粹性 混じり気のなさ、単一、美 不思議 神秘 未知 絶 偶然 | 単一、輝き、精力、充実、清朗、持続、 麗、安堵、慈悲 (愛)、端正、快適、悲 壯、永遠、莊嚴、自由、揺らぎ、侘び、 さび、数寄、神聖、大きさ、崇高、無常、 新鮮、その他 |

5 造形の展開・推移（上表に基づいて）

○**素材の場所** 立ち (pas・パ⁵) 素材を置く（立たせる）。

現在はカーヴィング（木彫）をする。理由は、素材が生きている（？）ことと、一回＝生を保つために型複製を拒否したい。大まかなかたちが素材に入る見当をつける。

素材の大きさを活かす努力は制作の場を自由にする問題であり、素材自体の持つかたちは「生まれでる以前の何か、何処か」¹を孕んでいる。

○**結構** 作業は彫り捨てることのみ、あり方、立ち方（結構）、は呼吸と同じように不断に検討されなければならない

○**生成** 彫った結果としてのかたちは、次のあらたなかたち展開への素材である。既知とは違うエネルギー・命 (zoe) のアウラ¹を放つかたちに出会えればうれしい。

○**造形の場所** 構想・計画は出来るだけ緻密に綿密に張り渉された活動・局面の展開を第一義に練られていたほうが良い。動勢は像と次の像との相互の瞬間に起るズレでもある。生きている証拠？

○**生命の場所** 個別を超えた生命を考える。制作に向かう“この時空”条件（例えば時代、

風土、季節、体調、情調など）一回＝生の営まれる制作葛藤、試行をも素材として、たちあがってくるかたちの「生成」を待つ。与えられている存在的・身体的与件、感覚、能力、エネルギー、境遇、性格、才能、めぐり合わせ的タイミング、も素材である。

造形の要素によって生まれでるかたちは、「かたち」の誕生＝発現として捉え、抵抗せずに ^{なげうつ} 抛 っておく。

○ “かたち①” に会う 「意図するかたち」と「恣意的、無意識なかたち」との間には、必ず同じ熱量で互いの反対側の、かたちが潜んでおり、説明のつかない未知の展開をして来るものである（配置・結構）。注意しておくべきことである。

○ “かたち②” に会う 今見た、感動に衝き動かされて現れ出てしまう情趣による非意図的なかたちの変移（結像）。動勢のような瞬間の連動にも注意する……



（ロダン『青銅時代』ロダン美術館）



（モデル・ベルギー人工兵オーギュスト・ネイ）

○ “かたち①②” さらに制作過程の思考、快への欲望、実存的あり方の「総体」（仏教で言われる五蘊⁴……、作者の業^{ごう}である。苦の因^{もと}らしい、弱さでもあろう。困ったものであるのだが、また裏腹に快のもとでもあり、美のもとでもあるので素材となる。）によって変化するかたちの探索を重ねる。

現れる新たな命の、輝き（アウラ）が伴っているであろうものを成り行きに従って取捨選択しかたちを残す。

○（エ）美の審究 大切な判断の基準である。基本的に心地良くないといけない。

不快なことはしない。美しくしなければならない。内容に悲や苦、劣情がおこっても最後は美に向わなければつまらない。生きる悦びなのかもしれない。

○ “かたち③”（生命の）に会う 納得がいくか、気力が途絶えれば、終わる。

熱量の問題である。これが彫刻と考える。……私が見たいものである。



（ミケランジェロ『ピエタ＝ロンダニーニ』
ミラノ・スフォルツア城）



（同彫り棄てられた基督の顔）

○（カ）表れの要素・非意図的情趣 生き方の類型的認識を指しており文学的・仏教的な認識⁴の説明と重なる。これを主題に仕事を始めることはない。意図に仕組まない理由は、生に派生する情趣を意図して露呈するのは嫌味が走り、美しくないからである。だが、生まれるかたちのうちに時おりアウラを放って見えるかたちであれば、新たなかたち③の発見でもあるように思う。

6 終わりに

この度は「彫刻について」の考えを述べる機会を頂いた、感謝の念に堪えない。

私は本フォーラムの中心的課題には全くの門外漢であるのだが、御好意に甘えて自由勝手に彫刻をする理由と造る推移について考えを述べさせていただいた。

本大会のテーマは「芸術の由来と思索の使命」という、大変大きな問いである。

大き過ぎて殆ど担えない。担えないが……前半の「芸術の由来」については、死ぬまで彫刻を続けることで「芸術をしたことになるのかな？」などと考えながら、その都度の自分の造る根拠を示すことをご容赦を願いたい。

後半の「思索の使命」についてはお手上げである。

荷が重すぎるとのご配慮であろう。司会の関口浩先生から、「ハイデガーは芸術の時代は終わってしまったという『芸術の終焉』を言うが、そうした時代にあってあなたはどんな対処をされますか」という補足質問を示された。

人は、芸術に限らずあらゆるものに終わりが有るのは知っているだろう。

多分、人はどんな場合でも考え続けることになる。そして何かを造ることは止めることがないのだろう。それが、哲学でなく、芸術ではなくなる、のかも知れないが……

今は、芸術をし続ける者は芸術の内を考える……昨今の他所を見れば、時々全く違った枠組みのコマーシャルイズムの活動を勘違いか、思慮不足かで、「芸術」とか、「彫刻」とか、称しているのが見えてしまうのが癪に障るが……

他所の枠組のあり方を云々するというのは、こちらの「……彫刻とは何か」を問われているということでもある。

もう高齢故、他所のあり方に言及する余裕は残されているとは思えないが、もちろん造り続けるのだから、「彫刻とは何か」という問いを問い続けるのは営みの最重要な課題ではある。造ることの新たな展開が有れば、場合によっては、枠とと思っているものを踏み超えて未知の次元に分け入ることになるのは、当然であろう。

枠組みから外れる覚悟をも持ち合わせなければならない。造ることとは時には破壊を伴うものでもあるのだから……

時代の動向はどうあれ、人は考え続けるし、創り続けるのではないか？

「芸術は終焉するのか」の問いも、彫刻の活動を選んだのだから、果たしてどうなるのか造って“見る”しか致し方がない。「只管、打坐」に倣い“只管、打彫刻”である。

最後にもう一度、本ハイデガー・フォーラムの「思索」への誘いには多大な感謝を……

楽しませていただいた。

そしてお集まりのメンバーの方々の哲学への真摯な熱意と緊迫には深い敬意と共感を
感じ得ない。将来への大いなる展開と、思索の果実の結実を祈念して止まない。

(以上)

註

1 aura (アウラ)

私が見る、かたちの中には輝きを放って見える特別なものがある。

それは早春の萌え出る若葉や若者の運動等に代表されるような「生命の躍動」とともに現れるかたちである。その輝きは、どのようなことによって特別なのかはよくわからないが大切な創作の契機ではある。

2 ポール・ゴーギャン (ボストン美術館)

『われわれは何処から来たのか われわれは何者か われわれは何処へ行くのか』



3 千利休 遺偈 『人生七十 力困希 咄
我這ノ宝剣 祖仏共殺ス
提グル 我 得具足ノ一太刀
今 此時ノ 天ニ抛』

4 五蘊 (「般若心経」 「蘊」は梵語 skandha 集合体の意) 現象界の存在の五種の原理。色・受・想行・識の総称で、物質と精神との諸要素を収める。色蘊は物質及び肉体、受蘊は感受作用、想蘊は表象、概念などの作用、行蘊は意志・記憶など、識蘊は認識、判断作用・または認識の主體的な心。また宇宙全体の構成要素ともされ、絶えず生滅変化するものなので、常住不変の実体はないとする仏教の根本教説。(広辞苑第5版)

5 pas パ 立つこと、静止ではなく動作である。ここではバレエ用語を借りた。

Yatsuhiko NIIZEKI

Die Sehenswürdigkeit für den Bildhauer

— Form des Lebens, "aura" der Form, die hingebende Form